＜書評論文＞

# 「共約」問題の新展開

## ——位相概念の導入——

Rema Rossini Favrette, Georgio Sandri and Roberto Scazzieri (eds.), *Incommensurability and Translation:Kuhnian Perspectives on Scientific Communication and Theory Change.* (Edward Elgar, 1999)

渡　辺　　毅

### はじめに

20 世紀の諸学を位置付ける一つの重要な特長として、「自己反省（言及）的眼差し」を挙げることが出来る。そこでは、従来学問にとっての安住の地として無邪気に信じられてきた客観性に対して疑義が提示され、むしろ、語ること、記述することそのものが探求の対象となってきた。しかしこの探求は極めて困難な領域である。自己反省（言及）的視点を導入した途端、記述的営みは至るところでパラドクスにでくわすことになるからである。

こうした困難に直面した記述的営みは危険な稜線上を歩むことに似ているかもしれない。その細い線の一方の側には相対主義の、もう一方の側には語ることに対する尊大な無自覚の深い谷間が常に口を開けているからである。社会構築主義、現象学、システム理論といった社会学における諸方法論はいずれも、この谷間のどちらの側にも陥らないように注意深く引かれた稜線として捉えることが出来るだろう。

本書が扱っている「共約可能性」の問題関心も又、この方法論のための一つのアイディアである。かつて信じられていたような、万人に共通の基盤をもはや信じることが出来ない地点から、「共約可能性」の問題は如何にして論じることが出来るのか。ここで提出されているアイディアは、この問いに対して極めて興味深い回答を準備している。

## 1 記号の変容としての知識

本書は、全部で28本の論文からなる論文集であり、全体として学際的な色彩が濃い。それぞれの著者は、応用言語学、社会学、論理学、経済学、科学哲学、といったそれぞれの領域から、それぞれに固有の問題関心を論じている。しかし一方で、それぞれの論者が依拠する枠組みにおいて極めて共通していることから、全体としては、「共約不可能性」という切り口によって切り取った一つの大きな断面図として読むことが出来る。そしてこの切り口としての方法論は非常に興味深い論理構成になっている。そこで先ずはこの方法論について概観しておこう[1]。

本書は、トーマス・クーンの科学史及び科学哲学の最近の展開を巡って構成されており、より新しい科学的知識の説明としての「翻訳」の中心的役割を探求し、新しい言語論的アプローチの方法論を構築することを目指している。

ここでは先ず、知識を「記号の変容」として位置付ける。この位置付けの強みは、科学的言語に関する諸知見を一般言語へと敷衍することが出来ることにある。結局のところ科学的言語も一般言語も、同じ言語的「層 layer」に属しているからである。いずれの言語も、「人間の経験の理論」としてより一般化されるのである。このようにして、言語学習と翻訳の問題は、重要な認識装置として位置付けられることとなる。言語が厳密に定義された体系ではないとしたら、我々は如何にして学習し、翻訳しうるのだろうか。ここに、共約不可能性と翻訳の問題が立ち現れる。これらの問題はいずれも、意味の構造と知識の成長を理解する上で決定的な役割を果たすことになる。

## 2 共約不可能性と翻訳

先ず言語における文法及び語彙に関して重要なことは、そのいずれも、表現（表象）されるに足るものと、そうでないものとを分かつ点にある。あるものが表象され、あるものは捨象される。この手続きによって、初めて人間は経験を構築することが出来るのである。では、この手続きは一体如何なるものなのか。

ここでは先ず、語彙と文法それぞれの役割が明らかにされる。語彙の働きは、偶発的な出来事（happenings）を、出来事（events）へと変容させることにある。未だ名付けられて

[1] 本書に所収されている全ての論文について詳細に紹介することは出来ないため、ここでは全体的な議論の枠組みを紹介するにとどめる。ただしこの不備を補うため、幾つかの論点について、脚注において若干の紹介を試みることにする。

いないような偶発的な出来事（happenings）に名前が与えられ、理解可能な出来事（event）へと変容してゆくのである。一方で文法は、出来事（events）を意味（meanings）へと変容させる。ばらばらに名付けられた語彙としての出来事（event）はそれぞれに関連付けられ、意味（meanings）として参照しうるような一連の繋がりを生み出す。

このようにして一般的コミュニケーションが導かれる。コミュニケーションは、表象／捨象という操作を介して形作られた語彙、及び文法の繋がりあいを辿るようにして行われると共に、新たな表象／捨象の操作を繰り返してゆく。ここに、位相空間論的概念が導入される。即ち言語は、語彙及び文法によって作り出された複雑な繋がりあいとしての抽象的な空間的連続体として立ち現れるのである。

では次に、この空間が展開してゆく過程をみてみよう。この空間が形作られるためにはそれぞれ、最小限の語彙と文法の存在を前提としなければならない。そしてこの前提が、（初期の意味での）パラダイムとして与えられる。即ち、これらの前提は正式に規定されて立ち現れるもの、というよりもむしろ、ある問題を「発見」するための手続きのなかで共有される「模範 paradigm=exemplar」として与えられる。この「模範」に暗黙のうちに従うことによって、あるものの類似性を発見する能力が与えられることになるのである。このようにして、語彙空間及び文法空間は、「模範」を手掛かりに「類推的に帰納されてゆく」ことになる[2]。

従って言語は、慣習的なものというよりもむしろ、進化的な過程として捉えられる必要がある。即ち、未だに名付けられていないものとしての happenings に特定の語彙が与えられ、events となってゆく過程であると共に、events が意味参照空間を構成してゆく不断の過程なのである。類似関係はそれぞれの群へと分類され、ただ単に happenings 及び events が蓄積されてゆく、というような、事実の単調増加による単なる複雑性、多様性の増大を免れることになる。そしてここに、「共約可能性」に対する一つの洞察が生まれる。即ち、それぞれに異なる発展過程を経て立ち現れてきた異なる空間は相互に共約不可能であると同時に、それぞれの空間内においては、間主観性が達成される、という訳である。

しかしここで重要なのは、この、「異なる空間」なるものが、「完全に異なる空間」を意

---

[2] この「類推的帰納」の過程については、Halliday, 'The Grammatical Construction of Scientific Knowledge: the Framing of the English Clause', （第6章）に詳しい。Halliday によるとこの過程は、「関係子 relator」→「状況 circumstance」→「過程 process」→「属性 quality」→「実体 entity」という順に、不可逆的に移行する記号の変容だという。言い換えるならば、より動的な「関係」として動詞或いは形容詞によって表現されていたものが、ある「実体」として、名詞によって表現されるようになる過程である。具体的には、例えば「洋服が古くなる」→「衣服の劣化」、「押す」→「圧力を加える」というようなものがある。ここではそれぞれ、「古くなる」という過程が、「劣化」という実体に、また、「押す」という動作が、「圧力」という実体に変容しているのが見て取れる。

味するのではない、ということである。もしもこの、それぞれに独自の発展過程を経て作り出されてきた空間が完全に異なるものであるとしたらそれは、「完全な共約不可能性 total incommensurability」として記述されることになる筈だからである。この言明は既に自己矛盾である。（もしも「完全に」共約不可能であるとしたら、我々はその対象を記述することはおろか、対象として認識することさえも出来ない！）従ってここで扱われる「共約不可能性」はいずれも、「局所的共約不可能性 local incommensurability」[3]のことを指している。このことを明らかにするために、この「言語連続体」が構成されてゆく手続きをもう少し跡付けてみよう。

## 3 言語連続体（linguistic continuum）の構成

言語空間が、「模範」を手掛かりにして「類推的に帰納されてゆく」ということは既に述べた。このようにして帰納された結果が、知識であり、人間の経験となる。そしてこの知識は、「局所的に伝播」してゆく。この伝播の過程が間主観性を達成し、それぞれに独自の言語空間を形作るのである。しかしここでいう「局所的」という表現には注意を要する。この表現は、「ごく一部」ということを意味するのではない。この用語の含意は、ｉ）伝播してゆく範囲を規定することが出来ない、ということと、ii）その範囲は必ずしも全体ではない(勿論全体であってもよい)、という2点を意味している。そしてこのことは同時に、観察の態度そのものの変更をも要求する。つまり、言語空間全体を鳥瞰するような視点に立って、ある空間とそうでない空間とを規定してゆくような手続きが一切不可能であることを意味するのである。ここで要求される態度は「虫瞰」である。即ち、常に言語空間の内部で、観察可能な、あくまで局所的な視界の範囲をのみ観察し、そこに達成されている局所的間主観性及び局所的共約不可能性を観察するのである。

この状況を理解するためには、「串団子」をイメージするのがよいかもしれない。互いにくっつきあった3個の団子は、「全体として一つの団子である」、と記述することも、又、「それぞれに異なる団子が3個集まったもの」、として記述することも可能である。更にあるいは、「実は目に見えないだけで、150個の微小な団子が集まっている」といっても差し

---

[3] Kuhn, T.S. 'Remarks on Incommensurability and Translation', （第2章）によると、Kuhn[1970]の時点においては「翻訳を、共約不可能性を解決する方法として理解している節があった」という。この「局所的共約不可能性」というアイディアは、このような翻訳に対する考え方と訣別する最初の段階であったという。

支えない[4]。いずれにしても、全部互いにくっつきあっているのだから。（もしくっついていなかったとしたらそれは、「完全に共約不可能」ということになってしまう。）このことは、要は観察する側の視点の問題であると同時に、どの観察結果が正しいのか、ということを一義的に決定することが出来ないことを意味している。

さて、このようにして知識の言語的構成が明らかになった。言語における標準は発展過程として立ち現れ、その標準は局所的に伝播し、言語連続体としての空間を形作ってゆく。言語における標準が生み出され、間主観性が達成される結果として同時に、共約不可能性が立ち現れることになるのである。

## 4 翻訳[5]

さて次に、翻訳についてみてみよう。翻訳とは一体如何なる手続きであるのか。従来の考え方に従えば、ある空間における元の意味を保存したまま、他の空間へと移しかえることとして捉えられる。この操作は、より高次の共通空間を発見し、その空間を通して対応関係を模索する試みであることになる。

しかし、既に述べた空間の発展過程についての議論を思い返すならば、このような高次の空間が存在しないことは明らかである。これらの空間は何かより高次の空間に所属しているのではなく、この空間の構成そのものが、人間の経験、認識を形作ってゆくのだから。

この観点に従えば、翻訳は次のように位置付けなおされることになる。即ち、ｉ）言語における語彙及び文法は、より高次の言語に置き換えることは出来ない、ii）あらゆる語彙及び文法は、同じ言語連続体の内部における類似関係によって生み出される、iii）翻訳は、近接空間内において類推を行うことによって達成される、のである。

このパースペクティヴによれば、翻訳を行おうとする２つの言語間の距離が、ある尺度において如何に遠いものであったとしても、他のより近い尺度（近接空間）を見つけるこ

---

[4] ここで重要なのは、あくまで、「3 個の異なるパラダイム」として決定してはならない、ということである。このような視点は「鳥瞰」に属する。

[5] 翻訳の問題については、具体的な事例に基づいて分析している論文が多い。例えばアリストテレスの科学と近代科学の比較（McDermott, T.S., 'Two Models of the Overlap of the Science: Modern Reductionism and Medival Abstraction, 第 5 章）や、アリストテレスの科学がニコマコス倫理学に翻訳される過程において、2 つの異なる解釈的伝統（パラダイム）を導いた事例（Vivenza, G., 'Translating Aristotle: At the Origin of the Terminology and Content of Economic Value', 第 8 章）、あるいは、科学的言説に関する、イタリア語と英語の比較検討（Rossini Favretti, R., 'Scientific Discourse: Intertextual and Intercultural Practice', 第 12 章）等がある。

とによって翻訳は達成され得ることになる。串団子の中に巣食っている寄生虫（？）は、それぞれの団子がくっつきあっている点を通ることによって、団子の外に出なくても隣の団子を食べることが出来るのである。

このような位相空間論的な近接空間の概念に従えば、翻訳は次の2つの同時に起こる認識的段階に基づいて行われることになる。即ち、ｉ）語彙的及び文法的属性の多様性が明らかに認識されること、即ち、あらゆる語彙及び文法が、「コンテクストによって特化された」属性の複雑な群として表象されること、ii）（語彙間、あるいは文法間における）類似性が、言語連続体における特定の（あるいは有限個の）次元において、類推的帰納によって特定されること、である。

多様性の認識と類似性の認知によって、翻訳は、多重に折り重なった類似性による仮想存在に基づくものとして位置付けることが出来る。つまりある翻訳は決定的に次の3点に依存していることになる。即ち、ｉ）「翻訳元の言語」に関連していると考えられる、語彙的及び文法的特長、ii）「翻訳先の言語」に関連していると考えられる同様の特徴、iii）両言語に関連付ける特定の対応関係を導く操作、である。

上述の議論によって、翻訳は多 - 次元的過程として立ち現れる。この多様性関係は、語彙的及び文法的多様性、という特徴によって可能となる。即ち翻訳は、それぞれの多様性の中に「類似性を認識すること」を介して両言語に橋渡しをすることとして位置付け直されるのである。従って翻訳は、何か確固とした手続きを介して厳密に行われるものではなく、その都度その都度、新たな類似性関係を模索しながら新しい架け橋を作り出してゆく発展的な過程であると同時に、それ自身、言語連続体を形作ってゆく手続きなのである。

## 5　自己言及から自己充足へ

この、共約不可能性及び翻訳についての議論は、冒頭に述べた「自己言及のパラドクス」という困難に対する一つの回答となっている。この観点に立てば、言語内に矛盾が形作られることは回避される。何故なら、パラドクスを導くためには、それを導くため前提としての、厳密に定義された体系、あるいは特定の関係性なるものが必要とされるからである。しかしこのような体系、あるいは特定の関係性はもはや存在しない。言語は不断に新しく形作られつづける発展的過程であり、何か静的な関係性が保存されるとは考え難いからである。しかしそれでも尚ある言明がパラドクスを導くとしたらそれは、たまたまある言語連続体内部のある場所に局所的に形作られた関係性が、その言明と調和しなかった状態、として捉えられることになる。

このようにして、「自己言及的パラドクス」は全面的に、「自己充足的トートロジー」に置き換えられることになる。言語連続体は自己充足的にそれ自身を存在せしめると共に、それ自身存在する。その意味では、例えばルーマンのオートポイエーシス・システムの理論に見られるような、従来論理的アポリアとして捉えられてきたトートロジーやパラドクスの問題を積極的に方法として取り入れていくような議論と極めて共通する部分がある。確かに、本書が「自己充足的」な視点を導入するために用いている位相空間の概念は数学におけるそれ[6]と比較すると、その字面やイメージは随分似通ったものではあっても内実は随分と異なるものである。又更に、この概念を用いて言語連続体を操作的に扱おうとするならば、そこには数多くの障壁が待ち構えているであろう。しかし一方で、数多くの領域からそれぞれに提出されている「自己充足的主体性」の議論を「共約可能性」の枠組みから再記述すると共に、社会学的な位相空間の概念をより充実させてゆくならば、本書において扱われている議論は極めて有望な方向性であると考えられる。本書が、共約可能性の議論を蓄積してゆく上で極めて重要な一歩であることは確かなようである。

## 文献

河本英夫 (1995), 『オートポイエーシス――第三世代システム――』青土社

Feyerabend, P.K. (1987), *Farewell to Reason*, Verso. U.K.=植木哲（他）訳『理性よ、さらば』法政大学出版局 1992

Kuhn, T.S. (1970), *The structure of scientific revolutions -- 2nd ed.* --, University of Chicago Press.

Luhmann, N. (1984), *Soziale Systeme: Grundriß einer allgemeinen Theorie*, Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main=佐藤勉　監訳『社会システム理論（上、下）』恒星社厚生閣 1993

Luhmann, N. (1990), *Essays on Self-Reference*, New York (Columbia U.P.)=土方透・大澤善信　訳『自己言及性について』国文社 1996

（わたなべ　たけし・修士課程）

[6] 本書の位相空間のアイディアは、多くの点で数学における位相空間論のアイディアに依拠していると考えられる。ただ現段階ではまだまだ、単なるアナロジーの観を拭い去ることは出来そうにない。今後、社会学的な意味での位相の概念について議論を積み重ねてゆくことが必要であろう。